

滋賀県道徳教材

近江の心



滋賀県教育委員会

刊行に寄せて

新中学校学習指導要領が、平成二十九年三月に告示されました。学習指導要領全面実施は平成三十三年度から、「特別の教科 道徳」については、平成三十一年からということになります。各学校においては、教科化に備え、それぞれに学校の重点内容項目を設定し、計画的な指導がされていることと思えます。

中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編には、

道徳科においても、主たる教材として教科用図書を使用しなければならないことは言うまでもないが、道徳教育の特性に鑑みれば、各地域に根差した郷土資料など、多様な教材を併せて活用することが重要である。

とされています。子どもたちの「郷土を愛する心」を豊かに育むには、優れた郷土教材の作成・活用が必要不可欠であると考えます。

昨年度の小学校版に引き続き、この中学校版においても、

先人の 『近江の心』を 未来へつなぐ

をテーマに、ふるさと滋賀を誇りに思い、地域社会に貢献できる子どもを育成することをねらいとし、滋賀県の誇るべき偉人等を取り上げた内容となっています。

本教材集の作成にあたり、道徳教材「近江の心」作成会議を設置し、本県の魅力を凝縮した教材を作成いただきました。各学校において、本教材が家庭・地域・学校の願いや、生徒の実態に応じて有効に活用され、生徒一人ひとりの道徳性が豊かに育まれることを、心から期待しております。

平成三十年三月

滋賀県教育委員会事務局 幼小中教育課長 西嶋 良年

目次

刊行に寄せて . . . 滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課

課長 西嶋 良年

〔読み物教材・指導略案・ワークシート〕

○ 『埋れ木』 3

○ 『藤樹先生と了佐』 7

○ 『近江商人の矜持―初代伊藤忠兵衛―』 11

○ 『福祉に生きる―田村一二―』 15

○ 『琵琶湖とともに』 19

(巻末) . . . 関係施設一覧

滋賀県道徳教材「近江の心」(中学校版)作成委員

	氏名	所属・職
委員長	鎰廣 修	栗東市立栗東西中学校 校長
委員	鎌倉 隆行	大津市立皇子山中学校 教諭
〃	北沢 貴史	豊郷町立豊日中学校 教諭
〃	野崎 和子	湖南市立甲西北中学校 教諭
〃	藤本 裕美	愛荘町立秦荘中学校 教諭
〃	森重 真紀子	東近江市立能登川中学校 教諭

※委員は50音順に記載

表紙絵 . . . 滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課 指導主事 田中 美穂

埋れ木

今から約二百年前の一八一五年、井伊直弼は、彦根藩主、直中の十四男として生まれた。五歳のとき母を亡くしたが、いつも父のそばで何不自由なく育てられ、様々な学問や武芸を身につけていった。ところが、十七歳のとき父が亡くなり、長兄の直亮が藩主になると、そんな生活は大きく変わった。もうすでに、直亮の次に藩主になる者も決められていて、ほかの兄たちもそれぞれ他家の養子になっていた。直弼は、年にわずかの給米をもらい、北の屋敷と呼ばれる城下の日当たりの悪い粗末な家に、弟の直恭とともに移り住むことになったのである。

それから三年が過ぎた夏、江戸にいる藩主、直亮から「養子に来てほしいという藩があるから、弟とともに江戸へ来い」という知らせが届いた。

「もうふたたび彦根にもどることはないだろう…。」直弼は親しい人々を招いて別れの宴を開いた。

江戸に着いた二人は、早速、養子先の延岡藩の面接を受けた。二人のうち、どちらかを養子にするということであったが、選ばれたのは、弟の直恭の方だった。これからの生活に期待していた直弼には、この結果はショックであった。別れの宴を開いて出てきた手前、すぐに帰る気にもなれず、江戸でぶらぶらと過ごしていた。

そんなある日、用事があってお供を一人つけて外出した時、江戸

城に向かう大名の行列に出会った。だれの登城かわからないままに、道端で体を小さく行列をよけていると、供の者が、

「若、これは延岡さまのお行列でございますよ。」

と教えた。直弼は思わず、

「そうか、直恭の供ぞろえか。弟は幸せ者だな。」

と言った。直弼は行列が見えなくなるまで、じっと見送っていた。そして、何か考えているようであったが、やがて、踏ん切りをつけたように立ち上がった。

この日を境にして、直弼は自分の生きる道について、「自分は、土に埋もれた木のように一生を送ろう。埋もれた木にもいろいろ生き方があるはずだ。」と考えるようになっていた。自身の境遇を受け入れ、埋れていながらも、世の中の雑事から離れて自分自身の道を極めようと決意したのであった。



直弼が修業時代を過ごした埋木舎
(彦根市観光企画課蔵)

翌年の夏、ふたたび彦根に帰った直弼は、北の屋敷を「埋木舎」と名付け、そこにこもって、武芸だけでなく学問と修養に明け暮れた。

心を磨くためにも、直弼は井伊家の祖先をまつる寺、清涼寺で修行にはげんだ。禅の修行を積み積むほど、その精神と相通ずる茶道に直弼は引き込まれていった。埋木舎に小さな個室を造って修行を続け、茶道の達人といわれるほどになった。茶

室を訪れる人には、「今日たてる茶は生涯しやうがいのに一回限り。昨日の茶でも明日の茶でもない。茶会の時の客も一生に一度の出会いだから、一服の茶といえどもおろそかに考えないで、お互いに親切と誠意をつくさなければならぬ。」と語り、「人生は一瞬一瞬が勝負だ。」という考たがえで物事に接していくようになった。

武士にとって大切な武芸けいこの稽古けいこも熱心にしたのは当然のことであるが、直弼は、試合形式をとる剣術けんじゆつをあまり好まず、居合いあい*を好んだ。そのわけをたずねられると、

「他人に勝つ前に自分に勝ちたいからだ。試合形式の剣術は、相手に手加減をされることがあるから、一気に刀を抜く居合いあいの方が性にあってる。」
と言いい、のちに新しい居合道いあいどうの一派を作った。



直弼は、

「わたしは、一日に二刻(約四時間)も眠ればそれでよい。」
と言いって、他に、国学こくがく、和歌、書道、絵画、華道かどう、陶芸とうげい、宗教、数学、天文学、政治、海外の様子など、様々な学問に精力的に取り組んだ。それが数十年も続いたのである。

弘化三年(一八四六年)、彦根藩の世継ぎであった兄、直元なおもとが亡く

*座まったままで、すばやく刀を抜いて敵を切る術

なったという知らせが埋木舎に入り、続いて、藩主直亮から「急ぎ江戸に来るように」という早馬はやうまがきた。思いがけず、直弼は井伊家三十五万石の跡継ぎの立場になったのである。一生、花の咲くことのない埋木とあきらめていた直弼にもようやく春がやってきたのであるが、その心境はどうであったろうか。

直亮の死後、三十六歳で彦根藩主となった直弼は、翌年、藩主として初めて彦根に帰国した。その後は江戸に住まいを移し、アメリカとの外交問題や、将軍の後継者争いという当時の内外の難局を打開する切り札として、幕府の大老たいろうとなった。この頃は社会が動揺どうりやうし始めており、変動しようとする社会にあって領民の心をまとめ、進むべき道を示すことが為政者せいせいしやである直弼の役割として新たに生じてきた。直弼はこれまでに培つちかった探求心を働かせ、為政者としてあるべき姿を模索もさくした。名君めいくんとなるべき修養を自らに課した直弼であった。

当時は、鎖国論さこくろんの観念が強かったにもかかわらず、現状をしっかりと認識した直弼の開国論は、大きな波紋はもんを呼んだ。しかし、現実的な見解と確固たる意志によって、日本を開国に導いた。

その後、激しい政治抗争こいうそうのすえ、江戸城桜田門外で刀に倒れ、四十六歳の生涯を閉じた。藩主となり、政治の表舞台おもてぶたいに登場してから十年後のことであった。



井伊直弼肖像画
(彦根 清涼寺 蔵)

- (1) 主題名 自分を見つめる <A 希望と勇気、克己と強い意志>
 (2) 本時のねらい より高い目標を目指し、粘り強く、積極的に取り組もうとする態度を養う。
 (3) 本時の展開 (例)

	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	教師の支援 (評価)
導入	1. 井伊直弼について知っていることを話し合う。 2. 資料を読み、直弼の生き方について話し合う。 ○「養子に来て欲しいという藩がある・・・」と聞いた時の直弼の気持ちはどんなだっただろう。	・彦根藩主、大老 ・開国、安政の大獄 ・桜田門外の変	・彦根に縁のある偉人であることを伝える。 ・生まれた時から藩主として育てられたのではないことを説明する。
展開前段	○弟の行列を見送りながら、直弼はどんな事を考えていたのだろう。 ◎埋木舎で学問や修業に熱中している時の直弼の気持ちはどんなだっただろう。	・うれしい。 ・これから全く違う生活を送りたい。 ・もう彦根に戻ることはない。 ・弟がうらやましい。 ・自分がなつて良かったかもしれない。 ・自分はいつまでたつても今のままだろうか。 ・自分に勝つ前に自分自身に勝たなければ。 ・他人に勝つ前に自分自身に勝たなければ。 ・今できることを一生懸命しよう。	・「ふんざりをつけた」時の気持ちを考えることにより、新しい決意をすする直弼の気持ちになつていく。 (発言) ・直弼の政策の根拠にある考え方としてとらえる。 (発言・ワークシート)
展開後段	3. 自分の生活を振り返る。 ○自分の目標達成に向かって大切にしたいことは何か。どういう風にかんばるのか。	・一生懸命ががんばる。 ・レギュラーでなくてもあきらめない。 ・粘り強く取り組む。	・ワークシートの「目標達成に向かって大切にしたいこと」に書き込み、交流する。 (発言・ワークシート)
終末	4. 教師の話を聞く。		

- (4) 評価 井伊直弼の生き方・考え方を理解し、自分の生き方に生かそうと考えることができたか。

(5) 板書計画 (例)

「埋れ木」

井伊直弼って？

- 彦根藩主、大老
- 安政の大獄
- 桜田門外の変

○弟の行列を見送りながら、直弼はどんなことを考えていたのだろう。

- 弟がうらやましい
- 自分がなつて良かったかもしれない
- 自分はいつまでたつても今のままだろうか。

◎埋木舎で学問や修業に熱中している時の直弼の気持ちはどんなだっただろう。

- 他人に勝つ前に自分に勝ちたい。
- 人生は一瞬一瞬が勝負だ。

☆井伊直弼の生き方から学んだこと・・・

- 粘り強く
- どんなことにも真剣に

目標達成に向かって大切にしたいこと

1 班	
2 班	
3 班	
4 班	
5 班	
...	



- * 参考資料 *
- 彦根城博物館 「井伊直弼のころー百五十年目の真実ー」
 - 彦根城博物館 展示解説シート
 - 彦根城博物館 企画展 「井伊直弼ーその人と生涯ー」
 - 彦根城博物館 書庫 6 「幕末期彦根藩の政治意識形成過程を中心にー」
 - 吉田常吉著 「井伊直弼」
 - 母利美和著 「井伊直弼」

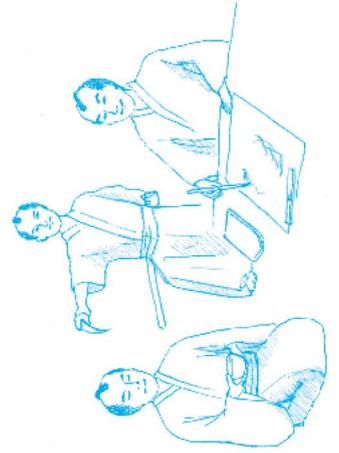
井伊直弼 年譜

年代	年齢	事項
文化12年(1815年)	1	藩主井伊直中の14男として生まれる。
天保2年(1831年)	17	父直中が死去。弟直恭とともに埋木舎(尾末町屋敷)に移り住む。以来15年間この屋敷で修行につとめる。
弘化3年(1846年)	32	世継ぎである直元の死去にともない、彦根藩の世継ぎ(時期藩主)となり江戸へ行く。
嘉永3年(1850年)	36	兄直亮が死去。彦根藩主となる。
安政5年(1858年)	44	幕府の大老となる。(4月23日) 日米修好通商条約を調印。(6月19日) 安政の大獄(9月～)
安政7年(1860年)	46	水戸浪士などにより江戸城桜田門外で暗殺される。(3月3日)

「埋れ木」

名前 ()

◎埋木舎で学問や修養に熱中している時の直弼の気持ちはどんなだったろう。



☆目標達成に向けて大切にしたいこと

○今日の学習を振り返って

- | | できた | | できなかった | |
|---------------------------|-----|---|--------|---|
| 1. 自分の問題として考えられた | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2. 新たな発見・気づきがあった | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3. 友だちの意見が参考になった | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4. 今日の学習で一番考えたのはどんなことですか。 | | | | |

藤樹先生と了佐



中江藤樹（藤樹書院蔵）

近江（今の滋賀県）の小川村に藤樹書院という塾はある。ここは近江でありながら日々、大洲（今の愛媛県）から、入れ代わりたち代わり、多くの者が中江藤樹という学者を先生と仰ぎ、遠路はるばるやってくる。塾では、いつものように多く

の門人を集めて、講義が行われていた。また講義が終わっても、夜遅くまで書院の明かりは消えることはない。それは藤樹先生が、了佐をつきつきりで教えているからである。これは一六四〇年ごろ、江戸時代に近江で活躍した中江藤樹とその門人たち、学問に生きた者たちの物語である。

「風邪は百病の長」と、了佐がつぶやいた。

藤樹先生はそれを聴き、

「風邪は百病のこれを長となしたりですよ」と優しく答える。

「風邪は百病のこれを長となし・・・」と、また了佐が続き、

「百病のこれを・・・」と、先生がまた丁寧に応じた。

その後、何度も何度もこのようなやり取りが続くのが日常だった。

了佐——姓は、大野という。了佐は大洲藩、二百石どりの武士の次男に生まれた。しかし、もの覚えが苦手な了佐の将来を案じた父は、武士になることは無理と思ひ、商人か職人にさせようとした。父の気

持ちを汲んでか、了佐もまた武士以外の道を考えた。そこで医者を目指した。

この日も藤樹先生と了佐は夜遅くまで勉学に励んでいる。了佐はいのだが、先生は朝から晩まで休むことを知らない。そんな先生を見て、ある時、門人の一人が先生の体を案じて、こっそりこう言った。

「藤樹先生。先生の了佐さんにかけられるお気持ちはいくら分かりますが、最近では、そのせいで先生の体力も限界がきておられるのではないのですか」

それを聴いた先生は無言で頭を振ったが、その門人の言葉を了佐は聴いていた。次の日から了佐は、熱心に通っていた塾に姿を見せなくなりました。

この日は、小川村で夏祭りがあった。門人たちは仲間と騒ぎ合い、夜遅く帰っていた。道中、浮かれ気味の門人たちの耳に、聴きなれた声が出た。

「風邪は百病のこれを長となしたり」

その声は了佐だった。そう言えば、「この辺りに了佐さんの家があったはず」と門人たちは思いながら声の方に目をやると、

「やっと、すらすら言えるようになった」と、無邪気に笑った了佐の声が聞こえた。

「了佐さんは、三日前に先生に教わったことを、今日までずっと復習している。それも祭りの日に、こんな夜遅くまで」

と、門人たちは胸に何とも言えぬ思いがこみ上げた。門人たちは、皆しばらくそこから動かなかった。

その時、「ドンドンドン」と了佐の家の戸をたたく音がした。

「了佐さん、ここを開けてください」と、ここ数日、塾に来ない了佐を案じ、先生と奥さんが了佐の家を訪ねてきた。

「了佐さん、にぎり飯も持ってきましたよ」と奥さんは言う。

「いやです。私のせいで先生の体は悪くなるのでしよう。そして寝る時間もないのでしよう。それもそう、医者になりたい私の夢のため、先生は医学書の参考書も作ってくださいるのですから。そんなことも私は気づきませんでした」

と、了佐は言い、また立て続けに、

「先生。先生は、こんな私に、先生が大洲藩の奉行ぶぎょうにおられたときから、学問を教えてくれた。先生が大洲から、母君ははきみのことを思い、故郷に戻られてからも、先生を頼ってわしはこの村まで来ました。でもよく考えれば、それも先生にとっては研究の足手まといです。先生も本当は私のことをそう思っておられるのでは……」

「了佐さん、先生に限ってそんなことはありません」と、奥さんがすぐさまこう答えた。

奥さんも困り果てたその時、今まで黙だまっていた先生が、いつもの優しい声で静かに答えた。

「了佐。私がいくら熱心に教えても、肝心かんじんのあなたに頑張がんばる気持ちが必要ならば、私もこうして教えることなどなかった。あなたは、どんなに学問がうまくいかなくとも、私から食いついて離はなれなかった」

そう言って先生は、その場を立ち去った。

了佐の家からは、すすり泣きが聞こえる。

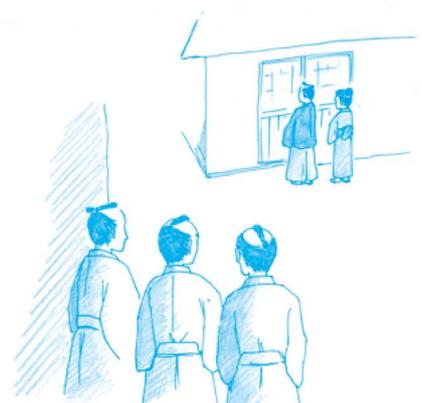
先生の言葉は、了佐にも、そしてそこにいた門人一同の心にも深く響ひびいた。

いちぶ始終しじゅうを見ていた門人たちは、たまらず先生の後を追いかけた。

了佐の家を少し離れたところで、門人たちに気づいた先生は足を止めた。先生の手には、了佐のためだけに作った医学の参考書が見えた。そして、先生は、手に持っていた参考書を門人の一人に手渡てわたして帰って行った。

門人たちは、先生の後ろ姿をじつと見つめた。

藤樹書院——ここで門人たちは先生の深い教えに包まれて、本当に大切なものとは何かを学んでゆく。塾は、その後も多くの門人を迎え、盛り上がりを見せた。特に名高い門人としては熊沢蕃山くまざわばんざんや澗岡山かみづらぎやまがいる。了佐も、三年あまりの年月をかけて、先生に作ってもらった医学の参考書を学び終えた。その後、母方の生まれ故郷の伊予いよへ帰った。そして、心やさしい医者として、村人に慕したわれながら医者の仕事をつづけたという。



(1) 主題名 < B 相互理解・寛容 >

(2) 本時のねらい

それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていこうとする態度を養う。

(3) 本時の展開 (例)

	学習活動・主な発問	予想される生徒の思い	教師の支援 (評価)
導入	1 中江藤樹について興味を持つ。 ①写真 ②「近江聖人」として仰がれた。 ③日本の陽明学の祖と呼ばれた。 ④安曇川出身。		・資料への導入とすること、中江藤樹について説明をする。
展開前段	2 資料を読んで話し合う。 ○藤樹先生と了佐が夜遅くまで勉強に励んでいることを、門人たちはどう思っていただろう。 ◎了佐の家で了佐と藤樹先生とのやり取りを聞き、藤樹先生を追いかけたときの門人たちの思いを考えよう。	・了佐に付き合っていては、先生がお体を壊してしまう。 ・了佐の物覚えが悪いために、先生に負担がかかっている。 ・了佐さんの思いを大切にされる先生は、すごい人だ。 ・了佐を悪く考えていた我々が未熟だった。 ・了佐さんを悪く思っていた自分が恥ずかしい。	・先生の身を案じ、了佐のこともを良く思わない門人たちの思いにふれる。 ・藤樹先生が了佐を認めていたことを知り、尊敬の念を抱くこととともに、自身を反省する門人たちの思いを考えることで、道徳的価値の理解を深める。
展開後段	4 自分の生活をふり返る。 ○門人たちが藤樹先生から学んだ、本当に大切なものはなんだろう。身近な人との関わりの中で考えてみよう。	・人それぞれよいところがある。 ・自分と違うところがあるても、それを認めることが大切である。	・意見だけでなく、その考えただけでなく、過去のエピソード等を発言させることで、ねらいに迫る。
終末	4 学習をまとめる。 教師の話しワークシートに感想を記入する。		

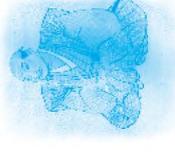
(4) 評価

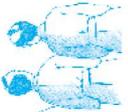
藤樹先生の了佐や新八を思う深い愛情に気づくことができたか。

(発言・ワークシート)

(5) 板書計画 (例)

藤樹先生と了佐





○ 写真の人物は誰でしょう。

○ 「近江聖人」として仰がれた。

○ 日本の陽明学の祖と呼ばれた。

○ 安曇川出身。

○ 門人たちは先生から学んだ本当に大切なものはなんだろう。身近な人との関わりの中で考えてみよう。

○ 了佐の生活を振り返る。門人たちが藤樹先生から学んだ、本当に大切なものはなんだろう。身近な人との関わりの中で考えてみよう。

参考資料 『藤樹先生』 編集・発行 高島市教育委員会
『物語 中江藤樹』 松下竜太郎

中江藤樹の教え「近江聖人中江藤樹について」近江聖人中江藤樹記念館
知行(ちこう)合一(ごういつ)

人々は、学ぶことによつて、人として行わなければならない道を知ることができる。しかし、人々ただで、それを行わなければ、本当に知ったことにはならない。物事をよく理解し、実行してこそ初めて知ることになる。

到(ち)良知(りょうち)

人は誰でも「良知」という美しい心を持って生まれている。この美しい心は、誰とでも仲良く親しみ合い、尊敬し合い認め合う心である。ところが人々は次第にみにくく、いろいろな欲望が起きて、つい良知をくもらせてしまう。私たちは、自分の見にくい欲望に打ち売って、良知を鏡のようにみにきがき、その良知に従い行いを正しくするよう日々、努力することが大切である。

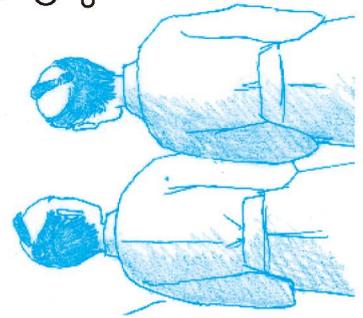
五事(ごじ)を正す(ただす)

五事とは「貌(ぼう)・言(げん)・視(し)・聴(ちよう)・思(し)」を言い、それを正すとは、なごやかな顔つきをし、思いやりのある言葉で話しかけ、澄んだ目でものごとを見つめ、耳を傾けて人の話を聞き、まごころを込めて相手のことを思うことである。普段の生活やまわりの人々とのまじわりの中で、自ら五事を正すことが、すなわち良知をみがき、良知に至る大切な道である。

藤樹先生と了佐	名前	年	組	番

○ 「一部始終を見ていた門人たちはたまたず先生の後を追いかけた」

この時の門人たちの思いを考えよう。



○ 生活を振り返って

○ 今日の学習を振り返って

	できた	できなかった	できなかった	できなかった
1. 自分の問題として考えられた	4	3	2	1
2. 新たな発見・気づきがあった	4	3	2	1
3. 友だちの意見が参考になった	4	3	2	1
4. 今日の学習で一番考えたのはどんなことですか				

近江商人の矜持——初代伊藤忠兵衛——



一八四二年七月、犬上郡豊郷村（現在の豊郷町）に栄吉という男の子が生まれた。彼の家は「紅長」の屋号で衣類など繊維類の小売りを生業とする近江商人の家系であった。そのため、彼自身も幼い頃から商売人となるべく育てられ、十一歳になる頃には、兄に連れられて近隣の村まで商売に出かけるようになっていた。

元服し、名を栄吉から忠兵衛に改めた後は、伯父に連れられ京都や大阪、山陽や九州にまで麻布の持ち下り行商を行うようになった。初めは見よう見まねで始めた商いも、一年が経つ頃には徐々に利益が上がるようになっていった。

ちょうどその頃、行商先で耳にした「長崎では外国人との貿易が盛んに行われているらしい」という噂に引き付けられた忠兵衛は、伯父の制止を振り切り長崎へと足を踏み入れた。当時の長崎は、日本で唯一外国へ向け開かれた港町であり、外国の商船の往来や外国人と日本人があちこちで交流する様子は、まさに異国の風景と呼べるもので、忠兵衛にとっては、衝撃的な光景であった。

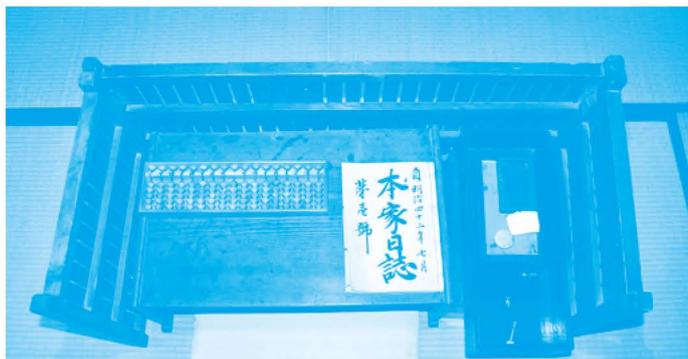
しかし、幕末の動乱の中、長崎では、外国勢力を打ち払おうとする攘夷派の活動が盛んであったため、多くの商人が身の安全から商いを敬遠するような地でもあり、様々な商品が品薄となっていた。そのため忠兵衛は大いに歓迎され、持って行った麻布は大変に喜ばれることとなった。

この時を境に、忠兵衛は故郷の近江で品を仕入れては、何度も九州まで足を運ぶようになった。時には征長戦争の混乱に巻き込まれ、仲間とともに数十日間も空き家で過ごすなど、命の危機にさらされることもあったが、「商売は菩薩の業」と心に誓い、三十一歳で大阪に店をかまえるまで、どんなにまわりに止められても九州への持ち下りをやめることはなかった。

一八七二年、大阪に「紅忠」の屋号で店をスタートした忠兵衛は、それまでの大阪の商店にはなかった様々な手法を積極的に取り入れていった。

開店と同時に店のきまりを定め、店主が店員を一方的に従わせるのではなく、能力さえあれば誰でも責任のある仕事ができるようにした。

また、今では当たり前となっている社内会議制を導入し、良いと思った意見はたとえ若い店員のものであっても



積極的に取り入れ、すぐさま実行に移すなど、店員全員を共同経営者のように扱った。

なかでも忠兵衛は、店員の教育に非常に力を入れた。入社した店員を、まず豊郷村にある自邸に住ませ、妻である八重夫人のもとで読み書きそろばんから礼儀作法までを半年間じっくりと身につけさせた。とりわけ「商品を大切に扱うこと」や、「商売において、いかなる時でも相手に決して嘘をつかないこと」をじっくりと教え込んでから、大阪の店へ配属するようにしていた。大阪に配属された後でも、問題が見られた場合は、再び八重夫人のもとで教育を受けさせるなど、徹底して店員を育てることにこだわった。

これらは、商品を卸してくれる業者や、商品を買ってくださるお客などの「買い手」のことを第一に考えた教育方針であった。相手の商品も自分の商品と同じように大切にし、売り買いの際も相手の足元を見た無用な駆け引きは決してしない真摯な姿勢が次第に評判を呼び、商品を卸す業者からも、「同じ卸すなら、紅忠さんに買って貰った方が気持ちがいい」と言われるほどになっていった。

そして何より忠兵衛は、ともに働く店員たちを非常に大切にしていた。毎月六回、一と六のつく日には店員全員を集め、支配人や店員の上下関係なく焼きパーティーをして、当時まだ珍しかった牛肉をふるまったり、相撲見物や夏の涼み船、お祭りへの参加など、たくさんレクリエーションを催したりと、店員たちと本当の家族のように楽しい時間を過ごした。

その結果、店全体の結束力が高まり、店員たちは皆、非常に高いモチベーションで仕事に励むことができたという。そうして忠兵衛と強い信頼で結ばれた店員のもと、紅忠は着実に業績を伸ばし、今日まで続く大企業へと発展していったのである。

近江商人の家に生まれ、生涯を通じて高いの道に生きた忠兵衛。彼の座右の銘である「商売は菩薩の業、商売道の尊さは、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの」の精神は、後を継ぐ者たちの中に今も脈々と息づいている。



(1) 主題名 よりよい社会の実現 <C 社会参画、公共の精神>

(2) 本時のねらい

「三方よし」（売り手よし、買い手よし、世間よし）の精神に触れることを通して、公共の精神をもっとよりよい社会の実現に努めようとする態度を育てる。

(3) 本時の展開 (例)

	学習活動・主な発問	予想される生徒の思い・反応	教師の支援 (評価)
導入	1. 近江商人について知る 「近江商人について知っていることはありますか？」	・ 商売が上手かった ・ お金持ち ・ よく知らなかった	・ 資料にスムーズに入っているよう、「三方よし」についてや、持ち下りの様子の写真等を使いながら近江商人の特徴について簡単に説明する。
展開	2. 資料「近江商人の矜持」を読んでもらう ○ 15年間も忠兵衛が長崎に向かい続けたのは、どんな思いからだったのだろう。	・ 商品が売れるから ・ 待ってくれている人がいるから ・ 自分が行くことで喜んでくれる	・ お金儲けだけでなく他の場所でもできたはずなのに、わざわざ危険を冒してまで、長崎に行く続けた部分について考えさせる。(「世間よし」)
展開前	○ 「同じ卸すなら、紅忠さんに買った方が気持ちいい」と言った人達は、どんな思いで買ったのだろう。	・ 信用できる ・ 自分の商品も大事にしてくれる気がする ・ 対等な関係な気がする	・ 自分の利益だけでなく、相手の立場も尊重しながら商売をしていたからこそ、信頼を勝ち取っているということに気づかせる。(「買い手よし」)
展開後	◎ 忠兵衛が商売をする上で、大切にしていた思いとはどのようなものだったのだろう。	・ 買い手のことも大切にしたい。 ・ 店の人にも気持ちよく働いてほしい ・ 自分以外の全ての人を大切に考えて商売をしていた。	・ 伊藤忠兵衛の考え方や行動が、「三方よし」や座右の銘の「商売は善徳の業」の精神と合致していることに気づかせる。 ・ 自分と関わる様々な人々の幸せを考えて行動することが、ひいては自分自身や社会全体を明るくすることに気づかせる。
展開後	3. 自分の生活を振り返ろう ○ 忠兵衛の生き方・考え方で、自分の生活に生かせることを考えよう。	・ 仲間を大事にする ・ すずんで掃除をする ・ 相手のことを考えて行動する	・ 三方よしの精神に触れながら、生活面に生かせる部分について考えワークシートに記入させる。 ※ワークシートの「三方よし」の部分は、配布時は空白にしておく。
終末	○ 教師の話		

(4) 本時の評価

先人の生き方から学んだことをもとに、自身の生活を振り返り考えることができたか。

(ワークシートへの記述)

(5) 板書計画 (例)



- 長崎へ向かい続けた忠兵衛の思い
- ・ 商品がよく売れるから
 - ・ すずんでもらえたから
 - ・ 長崎という町が好きだったから
- 「同じ卸すなら紅忠さんに」
- ・ 嘘をつかないから信用できる
 - ・ 自分の商品も大事にしてくれそう
 - ・ 対等な関係で取引ができる
- 忠兵衛が商売で大切にしたい
- ・ 買い手のことを大切にしたい
 - ・ 店の人に気持ちよく働いてほしい
 - ・ 自分以外の人を大切に考えて商売をした
 - ・ 「三方よし」の精神

「初代伊藤忠兵衛」



近江商人



- ・ 商売が上手だった
- ・ お金持ち
- ・ 遠くまで売り歩く？

出典

- ・ 「初代伊藤忠兵衛を追慕する」宇佐美英機編著
- ・ 「伊藤忠兵衛記念館資料」伊藤忠兵衛編

近江商人の矜持―初代伊藤忠兵衛―



名前()

組 番

○忠兵衛が商売で大切にしていた思い

○「三方よし」を自分の生活へ

○今日の学習を振り返って

	できた		できなかった	
①自分の問題として考えられましたか	4	3	2	1
②新しい発見がありましたか	4	3	2	1
③友だちの意見が参考にになりましたか	4	3	2	1
④今日の学習で一番考えたことも何ですか				



田村一二 (大木会もみ蔵)

障害のある人たちに対してまだまだ偏見や差別があり、教育の機会からも、社会からも締め出されていた戦前・戦中の時代から、障害児教育の実践に重きを置き、ともに生き、熱意を持って障害児教育に生きた人がいました。

田村一二は、一九三三年（昭和八年）京都市滋野小学校で教員生活をスタートしました。

特別学級を担当していたことです。田村は、「時間の制限のある学校では、一番子どもたちの内面がわかる、食事、入浴、就寝、起床、病気といった生活にはあまり触れられない。」と感じていました。「教室だけの教育」に限界を感じるようになっていたのです。そこで、児童を教室外に連れ出し、家に連れてきて一緒に食事をしたり、風呂に入ったりするなど、生活をともにする特殊教育の試みを始めました。何とか寝食をともにできる施設にかわりたいという気持ちが強くなっていたその頃、滋賀県職員であった糸賀一雄との出会いがありました。この後、糸賀の計らいで、大津市に十五人の知的障害児と田村が寝食をともにする「石山学園」が発足することになりました。

石山学園の発足当時は、敗戦間近の頃で、配給米も少なく、自転車

で京都の親戚や友人の家を回って、食べられるものなら何でももらってきたという日々でした。田村の奥さんや学園の保母さんたちは、草を刈ってきて、粥にまぜてかさを増す工夫をしていました。また、荒地だった学園周辺のくぬぎ林と竹藪の開墾は大変で、病弱だった田村を身体的にもたくましくするほどでした。

障害のある子の中でも、障害の程度や質にそれぞれ差があります。最初は、障害の軽い子である班長たちは、障害の重い子に対して「もつとぎょうさん（たくさん）運ばなあかん。こら、もつと頑張れっ」と怒っていました。この叱咤に、障害の重い子たちは、あわててしまったり、作業を投げ出して座ってしまったり、無理をしてたくさん運ぼうとして結局、枝を落としてしまったりしました。班長たちは、当惑した表情で田村を見ますが、そのまま放っていました。すると、そのうちに班長たちは、

「おう、ようがんばるとるな、えらいえらい、一本でもええさかい、きばって（頑張って）はこべよ」と笑顔で見守れるようになりました。

枝一本だけを運んでいる子にも「よくがんばった」と声をかけ、誉められた子は、ものすごく喜んでいきます。班長たちの声かけや表情が変わっていくと、一本だけ運んでいる子も、それを大切なもののように目の前に捧げて、にこにこして、スキップでとぶような足どりで運び出しました。この様子を、田村は、微笑みながら眺めていました。

同じ仕事を、汗を流してやっていると、相手の立場、中味がよくわかって、そこから誉め言葉が出てきました。「ともに体を動かし汗を流すこと」つまり「流汗同労」（田村の造語）の実践から、田村や園

児たちは、たくさんのお話を学んだのでした。

田村は、糸賀一雄、池田太郎とともに構想を練り、一九四六年（昭和二十一年）に戦争で家族を亡くした子どもたちと障害のある子どもたちが共に学ぶ施設、「近江学園」を創設しました。近江学園でも最初は庭づくりから始まり、先生も寮生も一緒に山仕事を行い、「流汗同労」の日々でした。また、近江学園では、職員の家族と園児も一緒に暮らし、田村自身の子どもも近江学園の中で学び、育ちました。田村は、人間どうし、人間と自然、いろいろなものつながりやを大事にしていくという「混在共存」の思想も持っていました。近江学園での毎日、人間と自然との接触によって、園児の中に、環境、年齢、経験、性別、いろんな差のある者同士の中に、人間としては何の別はないのだという寄り合う心が育ったのではないかと田村は考えていました。その後「近江学園」から年長児対策、成人対策の取り組みとして「一麦寮」が発足し、田村は寮長として赴任しました。

やがて、一麦寮を退職した田村は、障害のある人を一般の人たちの中に住まわせるという形ではなく、障害のある人たちの村に一般の人たちに入って来てもらおうという考への「茗荷村構想」を具体的に形にする準備を進めます。一麦寮時代の田村の著書「茗荷村見聞記」の映画化に伴い、関心が高まり、茗荷村構想は現実化していきました。

田村の村づくりの心打たれた元の住民たちが「先祖の土地が社会のために役立つなら」と無償貸与に同意してくれ、滋賀県愛知郡愛東町（現東近江市）に一九八二年（昭和五七年）に大萩茗荷村が開村しました。茗荷村は、障害のある人となない人が共に暮らす共同体として、滋賀県

の各地に広がり、およそ二十世帯二百人になっています。



田村は「茗荷村」を「桃源郷（ユートピア）」とする考えをきびしく指摘し、茗荷村を特別なものにしてはならない、こんな町はどこにでもある、ふつうの町だ、という社会をつくる願いを持っていました。田村は茗荷村を「目玉石けん製造場」と呼びました。あたたかい目玉（目玉せっけん）で地球を洗濯して立て直すことが目的で、障害のある子どもを見る人の温かい目玉、このあたたかい目を一つでも二つでも増やしたいと思っていました。

田村は、
「将来、茗荷村が、茗荷町、茗荷市になって、茗荷国になって、地球全体が、茗荷地球になったらいいなど。分けるようなことをせずに、全部一緒になって愉快地暮らせばいいんです。」と語っています。

語注…桃源郷（ユートピア）…俗世間を離れた理想郷。

(1) 主題名 福祉に生きる — 田村一二 — 〈C 公正、公平、社会正義〉

(2) 本時のねらい

田村一二の生き方から学び、差別や偏見のない社会の実現を目指そうとする態度を育てる。

(3) 本時の展開 (例)

	学習活動・主な疑問	予想される生徒の思い	教師の支援	〇評価
導入	1、田村一二、糸賀一雄、池田太郎の3人について簡単に説明する。	・糸賀さんは小学校版の「近江の心」で知っている。 ・滋賀の福祉に関わったすばらしい人たちがいたんだなあ。	・資料への興味を持たせるために、福祉施設や人物について説明する。 「近江学園」「信楽学園」など	
展開	2、「福祉に生きる」を読んでも考える。 ○石山学園で開塾の作業中に班長の子が他の子を誉め始めたとき、田村さんはどんな思いで見えていたのでしょうか。	・それぞれのできることではがんばる姿が見えてうれしい。 ・作業の少ない子も笑顔になってよかった。 ・班長の子の成長を感じてうれしい。 ・がんばりを認められるようになったなあ。	・個性や能力の違いを認めてあたたかく接する姿勢になったことに気づき、それを喜ぶ田村の気持ちに気づくようにする。	
前段	◎地球全体が“荖荷地球”になっただけでいいな…とはどんな思いなのだろうか。	・みんなが対等で暮らす世界が当たり前になってほしい。 ・どこでもみんなが幸せに暮らせる世界になってほしい。 ・差別や偏見のない社会や世界になってほしい。	・個人で考えて、その後、グループで話し合う時間を取る。 いろいろな意見が出せる雰囲気を作る。 ○理想の社会についての記述があるか。(発言・ワークシート)	
後段	3、自分の生活について考える。 田村先生の生き方を手がかりにして、よりよい社会を築くのに大切なことはどんなことだと思えますか。	・その人の良さや物事の過程に注目すること。 ・お互いが違いも含めて認め合っていくこと。 ・人に対して差別や偏見を持たずに接するよう心がけること。	○よりよい社会をイメージし、考えられているか。(発言・ワークシート)	
終末	4、教師の説話			

(4) 評価 差別や偏見のない社会を築くのに大切なことについて考えられたか。

(5) 板書計画 (例)

板書計画

福祉に生きる — 田村一二 —



・ 滋賀の社会福祉に人生を捧げた
・ 戦後間もなく糸賀さん、池田さんと「近江学園」を発足させる

地球全体が“荖荷地球”になっただけでいいな…という言葉はどんな思いから出たのでしょうか。

田村さんが目指した社会とは

↑

よりよい社会を築くのに大切なことは？

- (出典)
- ・「賢者モ来タリ逆ブベシ 福祉の里 荖荷村への道」 田村一二
 - ・「みんななちがつてみな同じ 社会福祉の礎を築いた人たち」 滋賀県社会福祉協議会
 - ・「みなながれしつこのいなか賢 愚 和 楽 —田村一二の世界」 田村一二
 - ・「シリーズ福祉に生きる10 田村一二」 野上芳彦
 - ・「荖荷村見聞記荖荷村見聞記」 田村一二

福祉に生きる―田村一二―

組 名前 ()

☆地球全体が「君荷地球」になったらいいなとはどんな思いでしょう。

☆よりよい社会を築くために大切なこととは？

○今日の学習を振り返って

- | | できた | | できなかった | |
|--------------------------|-----|---|--------|---|
| 1、自分の問題として考えられた | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 2、新たな発見・気づきがあった | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 3、友だちの意見が参考になった | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 4、今日の学習で一番考えたのはどんなことですか。 | | | | |

琵琶湖とともに

「やっぱり、お義母さんの作る鮎の飴炊きは最高だね。」

「実おじさんの『最高だね』が今年も聞けてよかったね、おばあちゃん。」

東京生まれ、東京育ちの実おじさんは、けいこ叔母さんと結婚して以来数十年、夏には欠かさず滋賀に帰省している。おじさん曰く、おばあちゃんの作る野菜や料理は今まで食べたどの料理よりも「最高」らしい。だから、おばあちゃんはおじさんたちが帰省すると、腕によりをかけて料理を作っている。でも、私は少し不満。だって、おばあちゃんが作る料理は鮎の飴炊きとか野菜の煮物とか、地味なものばかりだから。

「ともちゃんがうらやましいよ。こんなにおいしい料理が毎日食べられるんだから。」

「私はおじさんたちの方がうらやましいよ。東京に住んでたら、おいしいものいっぱい出会えるでしょ。あんなにも沢山のお店があるんだから。」

私はこの春、修学旅行で訪れた東京の街を思い出していた。高層ビルが立ち並び、至るところにお店があった。日本初出店のお店やテレビや雑誌で紹介されていた有名なお店もあって、行ってみたいところがいっぱいだった。

私の住んでいるところなんて、まわりは見渡す限り田畑が広がっている。おまけに高い建物なんてないから、遠くのみまでしっかり見える。きつと、東京では家の近所に鹿や猿が出没するなんてこともないだろう。

「いいなあ。東京は都会で。」

「なんだい。ともちゃんは滋賀が誇らしくないのかい。琵琶湖は日本一の湖だぞ。日本一。」

「それはそうだけど…。」

「鮎をはじめとして、おいしい湖魚のいる琵琶湖、その豊富な水資源

を利用して栽培されたおいしい米に、おいしい野菜。僕は誇らしくて仕方がないよ。」

「何が琵琶湖よ。おじさんの誇らしいのは、食べるものばかりじゃない。まったく調子がいいんだから。」

「いやいやそんなことはないよ。しかし、琵琶湖といえは、ここ数年全然行っていないなあ。よし、明日は琵琶湖までドライブに行こう。ともちゃんもね。」

強引に決められた琵琶湖へのドライブは天気にも恵まれ、おじさんは今日も「最高だね」を繰り返している。車窓からはジェットスキーやウインドサーフィンで湖の夏を楽しむ人が見える。

「気持ちよさそうだねえ。せっかくだから浜に降りようか。」

私たちの返事を聞くこともなく、すでに車は駐車場に入っている。私とけいこ叔母さんは、やれやれと顔を見合わせながら、おじさんの後について浜辺を歩き出した。

「ひどいなあ。なんだ。これ。」

おじさんの声で、足下を見ると花火の燃えカスやペットボトル、お菓子の袋などのゴミがあちらこちらに落ちていた。ひどいことをする人もいるものだ。

「よし、拾うぞ。」

おじさんが言った。

「えー。どうして、私たちが…。」

でも、おじさんはやっぱり私たちの返事なんて聞かずに、ゴミを拾い始めている。おばさんまで、すでに拾い始めている。仕方ないから、渋々、私も拾うことにした。

そういえば、小学校の行事で湖岸にゴミ拾いに行ったことがあった。あの時もゴミが落ちていたけど、一体誰が捨てているんだろう。そして、誰も拾わなければ、このゴミはどうなるんだろう。



小一時間ほど経ち、ようやく休憩することになった。

「どうして、おじさんもおばさんも、自分が捨てたわけじゃないのにゴミを拾おうと思うの。」

「どうしてって…。琵琶湖にとっては誰が捨てたかなんて問題じゃない、ゴミが放置されていることが問題だろ。人間が捨てたゴミを人間が拾うのは当然だよ。それに、このまま琵琶湖が汚れて、大好きな鮎が食べられなくなるのは困るからね。」

「ともちゃん、知ってる?」

そういつて、おばさんは、おばあちゃんから何度も聞かされたという四十年前に滋賀県で起こった出来事について話をしてくれた。

当時は、高度経済成長に伴い、滋賀県でも住宅や工場が増え、都市化が進んでいた。また、色々な商品があふれ、生活はどんどん便利になっていった。その反面、工場や家庭からの排水により、琵琶湖や河川の水質はどんどん悪化していった。そして、ついには一九七七年、琵琶湖で大量の淡水赤潮が発生した。湖面は赤褐色に変わり、辺りには魚が死んだような異臭が漂っていた。この赤潮の原因の一つが合成洗剤に含まれる「リン」だと知った滋賀県の人々は、自分たちの力で琵琶湖をきれいにしようと「リン」を含む合成洗剤をやめ、粉石けんを使う「せっけん運動」を始めた。その運動は「琵琶湖の富栄養化防止条例」制定の大きな力になり、合成洗剤から「リン」そのものをなくすほど社会的に大きな取り組みになった。



粉石けん使用運動

「今ではすっかり数が少なくなった瀬田しじみも、おばあちゃんの幼いころは、湖底にごろごろあって、子どもでも簡単にとれたそうよ。どの家でもふなずしを漬けていたし、琵琶湖で獲れた貝や魚が食卓

にあることがおばあちゃんの日常だったのね。きつと琵琶湖も、今よりもずいぶんきれいだったでしょうね。そんな幼い頃、慣れ親しんだ琵琶湖が異臭を放ち、見たこともない色に汚れていくのを目の当たりにしたとき、どんな気持ちだったでしょうね。しかも、その原因が便利さを求めた自分たちの暮らしにあったなんて…。」

私は、目の前に広がる琵琶湖の湖面が真っ赤に染まる様を想像し、思わず足がすくんだ。

「ともちゃんは都会がうらやましいって言うけど、確かに都会は便利よ。でもね、私たち人間にとっての便利さを求めるだけではないのかしら。」

「ともちゃん、この日本一大きな琵琶湖や滋賀の自然は、人間が現れるずっと、ずっと前からここに存在し、生きているんだよ。僕はね、滋賀県に帰ってきて、家の畑で採れた野菜や琵琶湖で獲れた魚を使っただお義母さんの作った料理を食べると、この自然に生かされていることを実感するんだ。」

湖面には夏の日差しが反射し、きらきらとまぶしい光を放っている。見慣れた景色のはずなのに、なんだかとても特別なものに見えた。

「さあ、けいこもともちゃんも、もうひと頑張りしようか。」

「うん。」

私は立ち上がり、力強く一步を踏み出した。



(1) 主題名 自然との共生 (内容項目D 自然愛護)

(2) 本時のねらい

琵琶湖と人間との関わりを通じて、自然に対して謙虚に向き合い、共生を目指そうとする実践意欲を育む。

(3) 本時の展開 (例)

学習活動と主な発問	予想される生徒の思い	教師の支援 (評価)
<p>導入</p> <p>1. 琵琶湖の写真を見る。 「この写真を見て、どう思いますか。また、写真に写っている場所はどこだろう。」</p> <p>2. 資料を読んで話し合う。 ○私はどんな気持ちで琵琶湖のごみを拾っていたのだろう。</p> <p>◎おじさん夫婦はどんな思いで ごみを拾っていたのだろう。</p> <p>◎きらきらと光る琵琶湖を見つめながら、私はどんなことを思っていただろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> きれいな景色 美しい風景 蘆島神社 日本海 琵琶湖 めんどくさい 嫌だなあ 捨てた人が悪いのに迷惑だ 人が捨てたものを自分が拾うなんて理不尽だ ごみを捨ててほしくない 琵琶湖を汚してはいけない 琵琶湖をきれいにしたい 琵琶湖にはお世話になっているから大切にしたい 大切な自然を守りたい 琵琶湖ってきれいだんだ 自然に生かされるなんて考えたことなかった 私は自分のことしか考えていなかった 琵琶湖の良さや大切さを忘れていた 昔の人が守ってくれたから、今の琵琶湖があるんだ 人間の勝手に琵琶湖を汚してはいけない いつまでもこの自然を大切にしなければいけない 	<ul style="list-style-type: none"> 写真を提示し、資料への方付けをする。 場面を思い起こせるように写真を提示する 多様な意見に触れることができようようにペアで話し合う ねらいと自身の価値に対する自分の考えをまとめ、クシートを用意する。 自然のすばらしさを再認識した「私」の気持ちに共感させるように写真を提示する。

3. 自分をみつめる

○今後、自然とどのように関わっていけばよいか考えよう。

- 自然を汚さないようにゴミのポイ捨てはしない
- 湖や山に出かけて、自然と触れ合いたい
- すずんで地域の食べ物を食べて、地域の恵みに感謝したい
- 水やエネルギーの無駄遣いをなくして、限られた資源を大切に使用したい

※人間と自然との調和を考え、共生を目指そうという思いがもたらしたか

4. 教師の説話を聞く。

終末

(4) 評価

人間と自然との調和を考え、共生を目指そうという思いがもたらしたか。

(5) 板書計画 (例)

自然とどのように関わっていけばよいか

節電・節水を心がけたい
海や山にでかけるなど自然とふれあう

ポイ捨てはしない

美しい琵琶湖の風景写真

いつまでも大切にしたい

人間の勝手に汚してはいけない

自然を自分達の手で守っていききたい

大切さを忘れていた

自分のことしか考えてなかった

琵琶湖ってきれい

きらきら光る琵琶湖を見つめる私

自然を守りたい

大切にしたい

琵琶湖をきれいにしたい

くれない

琵琶湖を汚した

おじさん夫婦

ゴミを捨ててほしくない

捨てた人が悪いのに！

嫌だな

めんどくさい

私

琵琶湖でのゴミ拾い

琵琶湖の写真

琵琶湖の写真

琵琶湖の写真

* 参考資料 *

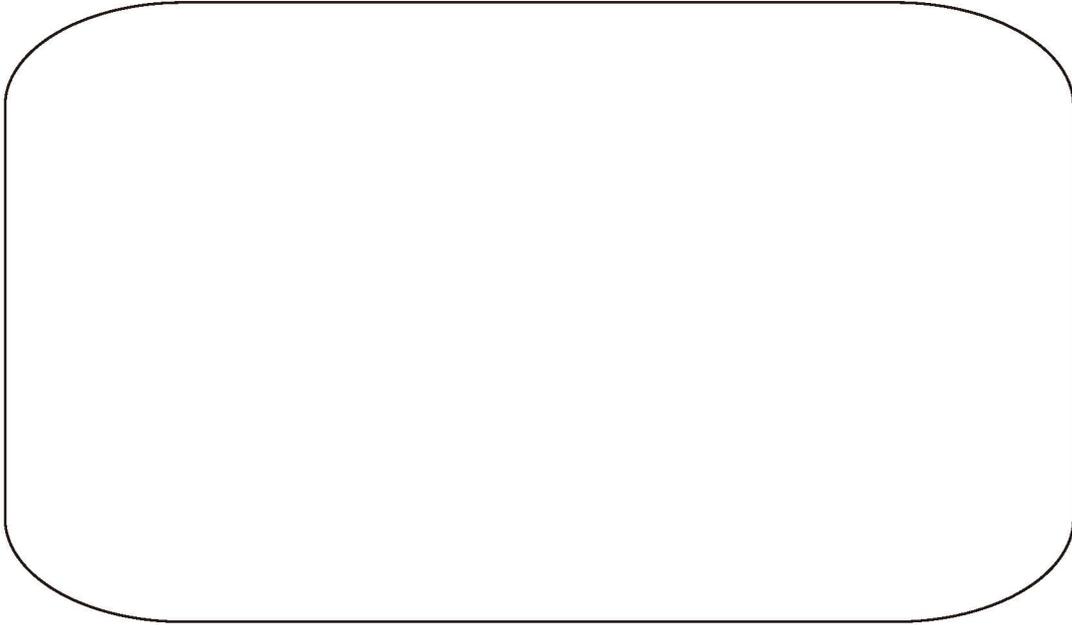
- 「びわ湖会議30周年・解散記念誌 守ろう環境を！みんなの手をつないで びわ湖会議のこころを未来へ」(「びわ湖を守る水環境保全県運動」県連絡会議30周年記念誌委員会)
- 「琵琶湖と環境 未来につなぐ自然と人との共生」(サンライズ出版)
- 「美しい湖を次代へ 琵琶湖条例制定のあゆみとその後」(株式会社 きょうせい)

月 日

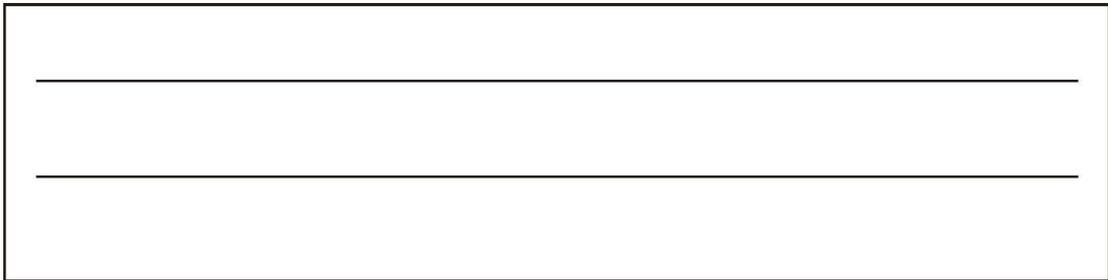
琵琶湖とともに

組 名前 ()

○きらきらと光る琵琶湖を見つめながら、私はどんなことを思っていたら。



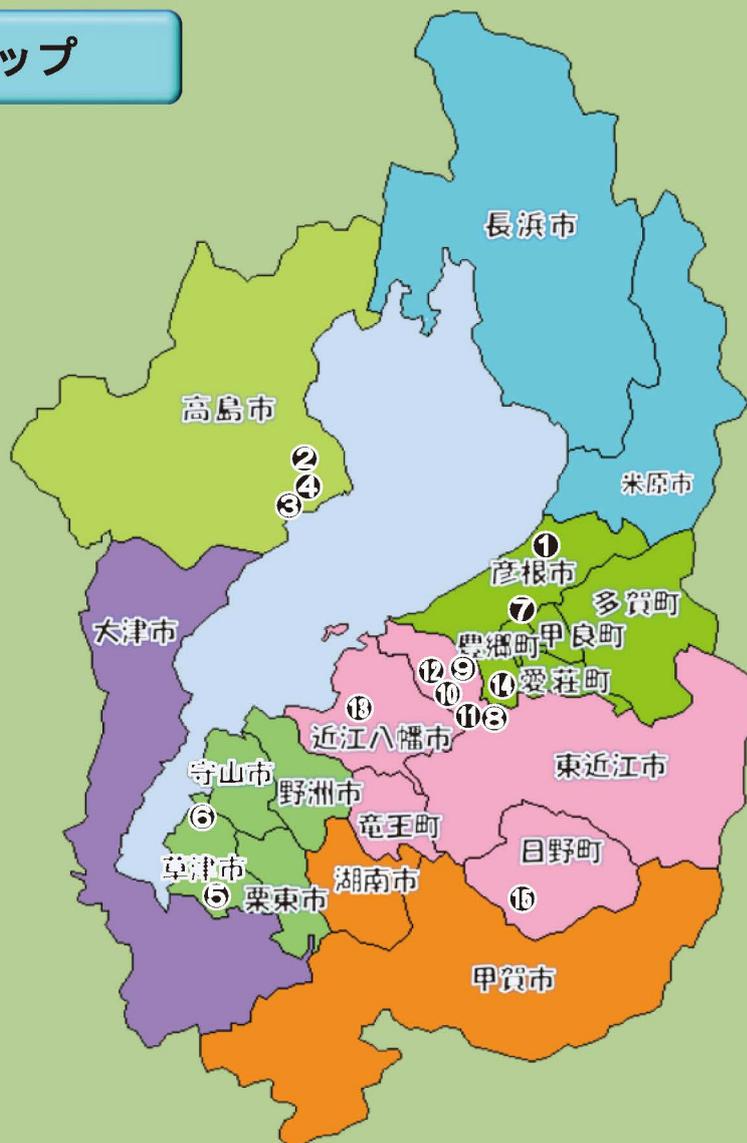
○今後、どのように自然と関わっていけばよいたら。



○今日の学習を振り返って

	できた		できなかった	
①自分の問題として考えられましたか	4	3	2	1
②新しい発見がありましたか	4	3	2	1
③友達の意見が参考になりましたか	4	3	2	1
④今日の学習で一番考えたことは何ですか				

施設マップ



施設	住所	電話番号	施設	住所	電話番号
○井伊直弼関係			○近江商人関係		
① 彦根城博物館	彦根市金亀町 1番1号	0749-22-6100	⑦ 伊藤忠兵衛記念館	犬上郡豊郷町大字八目 128-1	0749-35-2001
○中江藤樹関係			⑧ 近江商人博物館	東近江市五個荘 竜田町583	0748-48-7105
② 近江聖人 中江藤樹記念館	高島市安曇川町 上小川69番地	0740-32-0330	⑨ 五個荘近江商人屋敷 藤井彦四郎邸	東近江市 宮荘町681	0748-48-2602
③ 高島市良知館	高島市安曇川町 上小川225番地1	0740-32-4156	⑩ 五個荘近江商人屋敷 外村宇兵衛 邸	東近江市五個荘 金堂町645	0748-48-5557
④ 藤樹書院	高島市安曇川町 上小川211番地	0740-32-4467 (高島市文化財課)	⑪ 五個荘近江商人屋敷 外村繁 邸	東近江市五個荘 金堂町631	0748-48-5676
○田村一二関係			⑫ 五個荘近江商人屋敷 中江準五郎 邸	東近江市五個荘 金堂町643	0748-48-3399
⑤ 滋賀県社会福祉協議会	草津市笠山7丁目8- 138	077-567-3920	⑬ 近江八幡市立 郷土資料館	近江八幡市新町 二丁目22	0748-32-7048
○環境関係			⑭ 愛荘町立郷土の偉人館 西澤真蔵記念館	愛知郡愛荘町 野々目72-3	0749-42-7233
⑥ 琵琶湖博物館	草津市下物町1091	077-568-4811	⑮ 近江日野商人館	蒲生郡日野町 大窪1011	0748-52-0172

滋賀県道徳教材

「近江の心」(中学校版)

平成30年3月発行

発行：滋賀県教育委員会
〒520-8577
大津市京町四丁目1-1